生涯家計は自助で

国民生活白書 政府責任タナ上げ

悩み多い中年層

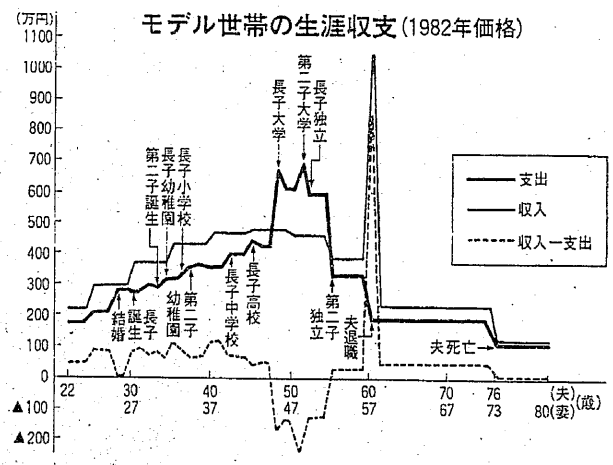
「人生八十年のゆとりと安定のために」と題する五十九年度『国民生活白書』（経済企画庁）が十一月九日発表された。

白書によると、五十八年度の勤労者世帯の実収入は月平均四十万九千円で、五十七年度の三十九万六千円から名目三・四%、実質一・五%増に止まった。このように収入が伸び悩んだ理由として「春季賃上げ率が五十七年度を下回ったことに加え、賞与の伸びが前年度を大きく下回っている」ことを指摘。そのため勤労者世帯の消費支出も、一世帯当たり月平均二十七万五千円と昨年度に比べ二・五%増に止まり、実質で〇・六%の微増となっている。

また、勤労者の平均貯蓄額は六百十万八千円。しかし、貯蓄目的は「病気や不時の災害の備え」が三四・四%、「教育費や結婚資金」が一八・三%などと必要にかられての貯蓄となっている。一方、勤労者一世帯当たり平均の負債残高は年々増え、五十七年百七十四万三千円だったものが、五十八年には二百七万九千円になった。白書は「負債の九割前後は住宅・土地費用である」とし、「負債の年収に占める割合や負債保有世帯の比率も増加傾向にある」と指摘している。

一方、白書は〝モデル家計〟を設定して賃金・一時金・退職金・年金などの生涯総所得と教育・住宅取得費などを含む生涯総支出を計算、「生涯では黒字となる」ことを強調。年代的には一番苦しい四十～五十歳代の家計でも「生涯設計をたて、合理的に貯蓄、負債を管理していけば乗り切れる」とし、「住宅などの借入金は二世代ローンで」とか、教育費は「予め積み立てを行うか、教育ローンを活用すること」などとお説教。

結局、白書の結論は「豊かな老後を自助努力で」というわけだが、高値安定の土地・住宅、高騰する教育費、後退する一方の公的福祉など、政府の責任は全くタナ上げしている。



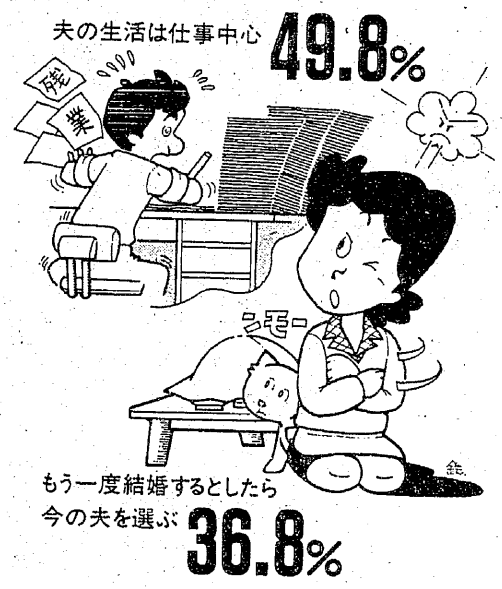
白書は夫婦と子供2人の平均世帯の場合、一生働いて257万円の赤字と計算しているが、40歳台後半から50歳台前半は余裕がなく、とくに男性に重圧がかかっており まさに〝悩み多い中年層〟を浮き彫りにしています。

くらしと統計

夫たちは合格点？

夫に対する評価点数を第百生命会社が調査（全国23都市）したところ、八十点が最も多く二九・〇%、次に七十点が二三・九%、そして九十点が一七・三%という結果が出ました。多くの主婦が夫を評価しているようです。ところが、「もう一度結婚するとしたらまた今の夫を選ぶか」との質問に、イエスと答えた主婦はなんと三六・八%でした。

評価が高いのになぜでしょうか。調査によると主婦の四九・八%が「夫の生活は仕事中心」とみており、このことからくる夫婦の会話不足が問題のようです。つまり「夫は仕事熱心で言うことない人だけど、もうひとつシックリしない」というところでしょうか。夫の生活を仕事中心とみる主婦は二十代の主婦の三五・四%に対し、四十歳代の主婦は五六・〇%です。主婦の精神衛生を調べた国立精神衛生研究所によると、二十代の主婦が最も状態が良く、逆に最悪なのが四十代前半。二十代では家族の団らんに幸せを見出せるのに対し、四十代はそうでなくなっていることが大きく原因だそうです。自立していく子どもたち、仕事中心になる夫。妻の精神衛生のためにも、そして良き〝フルムーン〟を迎えるためにも、仕事はほどほどに。



三池炭鉱の歴史の中から

奇妙奇天裂な保安部あずけ

その三 第十六回

十五分会 武松輝男

三池炭鉱には『保安部あずけ』という奇妙奇天烈な制度がある。この制度も智恩社という仏教教義がその底辺にうごめいているので、仏教の梵（ぼん）語から造語されている摩訶不思議といったほうがよいのかもしれないが、この制度が現場で起きた災害数を操作してその災害数を統計上少なくしようとする、まるで手妻（手品）のようなことをするので奇妙奇天烈ということにしている。

その手妻の裏種をみることにしよう。

「ちょっと昔の話になりますバッテン、私が坑内で怪我バしたときのことですたい。怪我バしたチ言うて係員詰所に行って、怪我の証明書の現認書バ書いてくれチ言うとですナ、それには返事バせんで保安部あずけにしてくれと言うて係長と係員が寄ってたかって言うとですたい。係長はですナ、頼むけん保安部に行ってくれて言うて縋るごとして頼むとですたい。そげんまでして言わるるとほんに断りにっかです。そればですナ、臍に力バ入れて断ったですたい。そしたらですナ、最初だけ保安部に顔バ出してもらうとよか。そんあとは家に居ってよか、ただ毎日電話だけバしてもらうとよか、テ係長は言いましたたい。

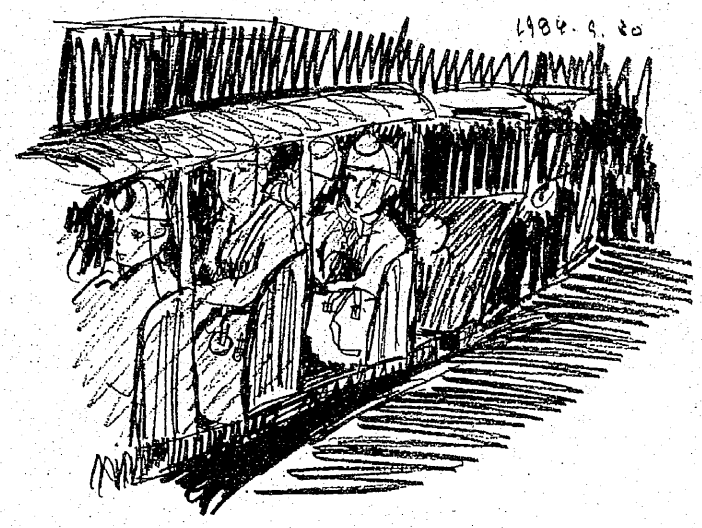
私は二カ月間、家に居て電話しただけで会社に出勤したごとなりましたデス。

二カ月の怪我テ言うなら重傷じゃなかかてですか。そげんですたい。そん重傷がですナ、三池炭鉱ン災害の数ン中から消えたつです。あんた、おかしかテ思わるるでっしょ怪我が怪我じゃなかごとなるとですけん。

怪我バ隠したりすることは悪かことは十分わかっとるです。隠したりするもんで三池炭鉱は怪我の少なか、保安のよか、働き易か炭鉱テ言う印象バ世間に与えとる。ほんなこと言うとそれはウソで逆さまであっとバですナァ。

それバッテン、そのウソで逆さまになぜ協力するとかテ言わるるとですナ、報復の恐ろしかけんですたい。どんか報復かテですか。いろいろあるバッテン、ひとつだけ説明しまっしょ。

私はいまC級（出来事給）で三十万円。手取りじゃなかデス。それがですナ、怪我ン治って出勤するとB級（流動固定給）にさるるです。そうですナァ、荒で十八万円ぐらいになるでっしょか。つまりですナ、給料が下がるごたる、そういう報復の配役バさるるです。それがいつまで続くかわからんでっしょ。それじゃやりきれん、それでですナ、保安部あずけは受け入れるとですたい。報復バ受けた者バ知っとるかてですか、何人でん知っとるです」



会社の方針は、石炭援助金とのからみもあって年間災害件数を減らすこと。それだけをきくと立派なことであるが、災害にあった労働者が言っているように、職制たちの切願とドウカツとで被害件数がつくられている。

有明鉱坑内火災が起きた前の年には、三日以上休業の軽傷が、重傷の八十六分の一というように考えられない件数になっているし、それにひきかえ保安部あずけは、死亡、重傷、軽傷を合わせた件数の三倍にもなっている。

そんな馬鹿な、とだれでもが言う。そんな馬鹿なことが、会社の方針からつくられた尺度（智恩社の生霊）ではかられながら、会社の方針の許容量の範囲に、被災数がつくられているのである。

（カットも筆者）

『石炭労協』が発足

三単産が結集 将来は組織統一か

総評、同盟など上部団体の枠を超え、石炭産業の三つの労働団体が協同して十一月十五日、東京の池之端文化センターで、「石炭労働組合協議会」（石炭労協）を発足させた。斜陽化する石炭産業に対し、労働組合としての産業政策闘争の強化と将来の組織統一を展望したもので戦後初めての大同団結である。また、全民労協への参加を背景に、競合組織間の産別一体化は紙パ労協につぐ動きとなる。

同協議会へ参加した単産は総評翼下の日本炭鉱労働組合（炭労＝橋本 亮委員長、一万三千人）と同盟・全国石炭鉱業労働組合（全炭鉱＝岡 新一委員長、四千七百五十人）、中立の全国炭鉱職員労働組合協議会（炭職協＝鈴木照生議長、二千七百六十人）。

すでに労働三団体は八〇年十一月に炭政会議を結成し共同闘争にとりくんでいるが、今後さらに強力な産業政策闘争を展開するため炭政会議を発展解消し、協議体を結成したもの。組織規模は三団体二十四労組、約二万人で組夫などを除き、石炭産業に働くすべての労働者と組合を一〇〇%結集することになった。

結成総会であいさつした野呂潔会長（前炭労委員長）は、きびしい石炭産業の現状にふれながら「このままでは石炭産業と炭鉱労働者に明るい展望は生まれてこない。過去のすべてのゆきがかりを捨て、炭鉱労働者の全力を結集し、幅広い政治力の構築とあわせ、新たな政策闘争を成功させよう」と呼びかけた。

採択された活動方針は「全民労協の趣旨に立って」、基調に「力と政策」「目的が一致する政党、各種団体との協力」などを設定。当面の具体的な課題として、①石炭政策の充実、②石炭産業の保安確立、③労働福祉諸条件の向上などである。

さらに組織の性格と目的は、当面ゆるやかな協議体としているが、五年以内に連合体への移行をめざす方針だ。

なお、石炭労働者は六〇年頃の炭労二十万人も含む約三十万人を最高に減少傾向となっている。新役員は野呂会長、小山和衛事務局長（全炭鉱）などである。

（連合）

新年号の原稿募集

短編創作・随筆・職場や家庭からのレポートなど
千二百字以内、一人一篇。
私の主張・保安
千字以内、一人一篇。
詩・短歌・俳句・川柳・狂句など
詩は一人一篇。短歌五首。
その他は五句まで。
写真・絵・マンガなど
一人一点。できるだけ白黒で、大きさは自由。
その他、コント・笑話・子供の作文・姿見など
千字以内、一人一篇。
締切り 十二月十日
紙上匿名は自由ですが、住所と氏名は明記のこと。謝礼はとくにありませんが、心ばかりの記念品を贈ります。